

7月20日(土)6年ぶりに芹沢光治良記念館を訪問した。兼ねてより文学愛好会代表の和田安弘様よりお誘いを受けており、今般企画展「光治良と川端康成」が実施されているということで是非とも拝覧したい思いで訪問させていただいた。拝覧の話の前に私の光治良先生と康成先生との出会いと印象について紹介したい。

私と光治良先生との出会いは1991年。90歳で書かれた『神の微笑』を偶然にも書店で見かけ、その本の前で何かに取り付かれた様に体が動かなくなってしまった。運命的な出会いを感じる。それ以来神シリーズ8巻、小説人間の運命、教祖様他10以上の小説を読んできた。今も尚、勝手ながら光治良先生を我が師と思って敬愛している。特に私が30代後半から40代に掛けて人間形成に相当な影響を受けている。光治良先生の印象は、芯はお強いがお優しい。冷静でおとなしいが、曲がったことが大嫌い、だれにでもはっきりものを申す。縁の下の力持ちで大きな仕事をするが目立たない。家族や知人をとても大切にす。一言で言うと利他の人である。

一方、康成先生と出会いは私が20歳、越後長岡の大学に3年次編入の時だった。まさしく越後を舞台にした小説雪国は衝撃的であった。私は若さゆえの好奇心と女性への憧れからその後康成先生の小説を20以上読み続けた。康成先生の文の綺麗さに魅了されて一時期は他の小説家の作品が雑過ぎて読めなくなってしまう時もある。私が20代前半時、女性に対する甘美な考えや行動に相当な影響を受けている。康成先生の印象は、気が小さいところがあって我儘。人を選んでからはっきりものを申す。目立つことが好きで全面的に自分を主張する。女性を溺愛するが、家庭は持たない。一言で言うと自我の人である。

さて、記念館主事の剣持直樹様にはたいへん丁寧に企画展を御説明いただいた。今回の企画展の目的である“生まれも育ちも、その作風も大きく異なるふたりが、晩年に近い年齢において最も綿密な関係を築くことになった、その不思議さ一端を解き明かす“は、豊富で工夫を凝らした展示物や御説明から十分理解することできた。

その不思議とは先ほど述べた様なお二人の先生方の陰と陽程の性格の違いがうまく融合されて大きな力になったことであり、そのことが世界ペンクラブ東京大会を成功に導き、更には康成先生のノーベル文学賞受賞に結び付いたのではないだろうか。

更にお二人の綿密な関係の中での光治良先生の言動は、人間としてあるべき姿”利他の心“を我々に無言で教えてくれている。山梨県 折笠公德61歳 エンジニア